

若者のうつ病および双極性障害は心臓血管病の早期発症リスク病態
—米国心臓協会（AHA）が声明を公表

成人では、気分障害と心臓血管病に強い関連性があることは広く知られており、気分障害がある人では、ない人に比べて心臓血管病の有病率が高いこと、より早期に心臓血管病を発症することが報告されている。

そこで本研究では、30歳未満の若者の気分障害と動脈硬化の進行および心臓血管病の早期発症との関連についての研究をレビューした。その結果、若者の大うつ病性障害と双極性障害^(註1)は動脈硬化進行と心臓血管病早期発症の「中等度リスク病態^(註2)」であるという見解に至った。抗うつ薬や精神安定薬の使用が体重増加など代謝性障害をもたらす可能性が指摘されている。代謝性障害は心臓血管病リスクを上昇させるため、大うつ病性障害と双極性障害の治療薬がリスク上昇に関与する可能性も考えられるが、明確なエビデンスはなかった。また、これらの薬剤が使用されていない時代から気分障害と心臓血管病リスクの関連は指摘されていた。

したがって、薬物治療を受けているか否かにかかわらず、全ての大うつ病性障害と双極性障害の若者に対して、心臓血管病リスクを低減するために早期からのモニタリングと積極的な介入が重要である。

（註1）双極性障害…「躁うつ病」と呼ばれていた病気に相当。躁の症状とうつの症状を繰り返す病気。

（註2）中等度リスク病態…30歳までの動脈硬化の進行に寄与すると考えられる機能障害の病態生理学的なエビデンスがある状態。

出典：Circulation. Published online Aug 10, 2015;

pii: CIR.0000000000000229